# 第４節　集落の景観

## １　集落の位置と農家建物の関係

### ①序論

#### １）調査の背景と目的

集落景観は、地域の風土や人々の生活・生業、文化などにより形成されている。そのため、各地域には様々な地域特有の集落・生活空間が存在し、独自の景観を構成している。このような、地区の生活や生業により形成され、その特徴を現在も継承している景観は、平成 17 年（2005）の文化財保護法改正以降、「重要文化的景観」として選定され、保護が行われてきた。

大分県豊後大野市緒方盆地[注 1)]には、水田耕作を生業とした農村集落が存在し、盆地特有の地形により独自の景観を形成している。近年、この集落における景観を重要文化的景観として保護しようとする取り組みが行われている。文化的景観を継承するには、集落構成や風土、人々の生活・生業と、景観を構成する要素の関係を理解し、保全に努めることが重要である。

そこで本調査では、緒方盆地の生活・生業と集落構成や生活空間の関係を把握し、当該地域の景観の特性を明らかにすることを目的とする。

#### ２）調査の方法

本調査では、緒方盆地にある複数の集落から、盆地特有の地形と集落の関係が顕著に表れている上自在地区を対象とする。

はじめに、緒方盆地の景観に大きく影響を与えた歴史的な事象や緒方盆地の集落構成の特徴を把握するため、資料文献調査[1) 2) 3) 4)]を行った。次に、上自在地区の住民が、地区内で営む生活や生業に関係する要素を特定するため、住民へのヒアリング調査を行った。

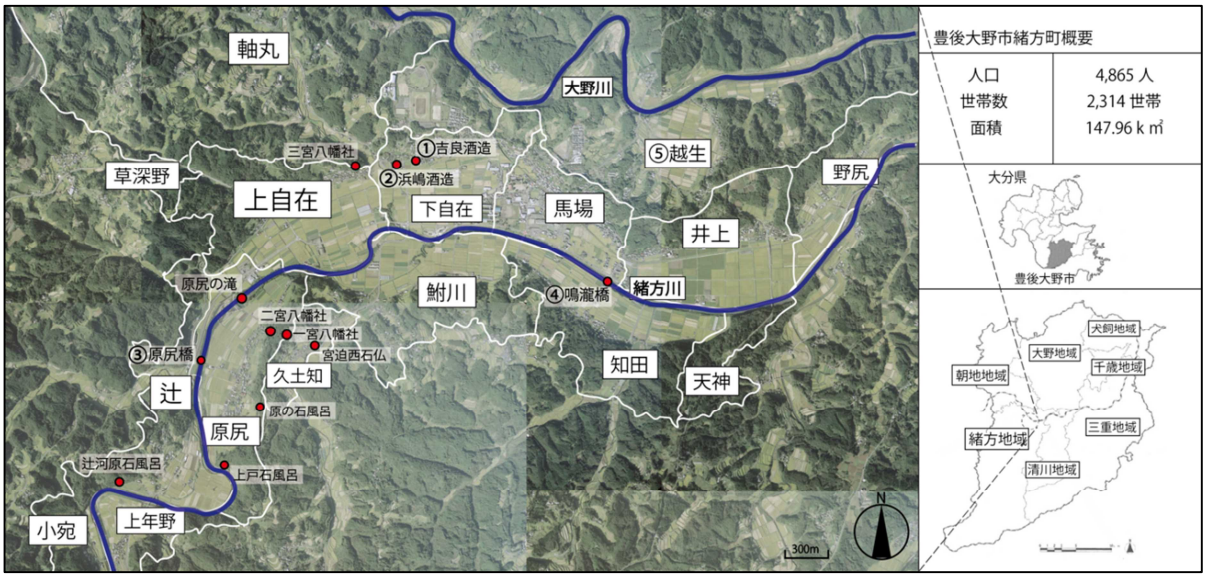


図１　緒方盆地の概要〈参考文献 1）5）を元に著者が編集〉

また、緒方盆地の人々の生活や生業に特に影響を与えたと考えられる昭和 47 年（1972）の圃場整備以前から現在にかけての変化を、航空写真より確認し、生活・生業への影響を述べる。

その後、生活・生業に関する施設や、要素の分布を示した現在の集落構成図と、地区の特徴的な地形や家屋の断面図を作成する。これらの図面により、上自在地区の集落構成・生活空間特性と生活・生業との関係を明らかにする。

## ②調査対象地

### １）対象地の概要

大分県豊後大野市緒方盆地は、大分県南部に位置している。緒方盆地の地形は、阿蘇火砕流堆積物により形成され、溶結凝灰岩に覆われている。そのため、緒方川の侵食によって形成された巨大な滝や、石風呂[注 2)]、石仏などの石造文化が存在する。主な生業は農業であり、緒方川やその周辺の河川から井路（農業用水路）を引き込み、水田耕作がなされている。その米を使用し、現在は 2 軒の酒造（図 1①,②）が営まれている。また、五穀豊穣を願い、一年を通して様々な祭りや民俗行事が行なわれている。

### ２）対象地の歴史

緒方盆地では、水田耕作のため、寛文 2 年（1662）に緒方上井路（図 2①）が開通し、井路沿いに集落（図 2②）が形成された。緒方川や複数の河川（図 2③）から緒方上井路・緒方下井路（図 2④）に水を取り込み、水量を増やして下流の田に灌漑用水を送る仕組みが造られた。

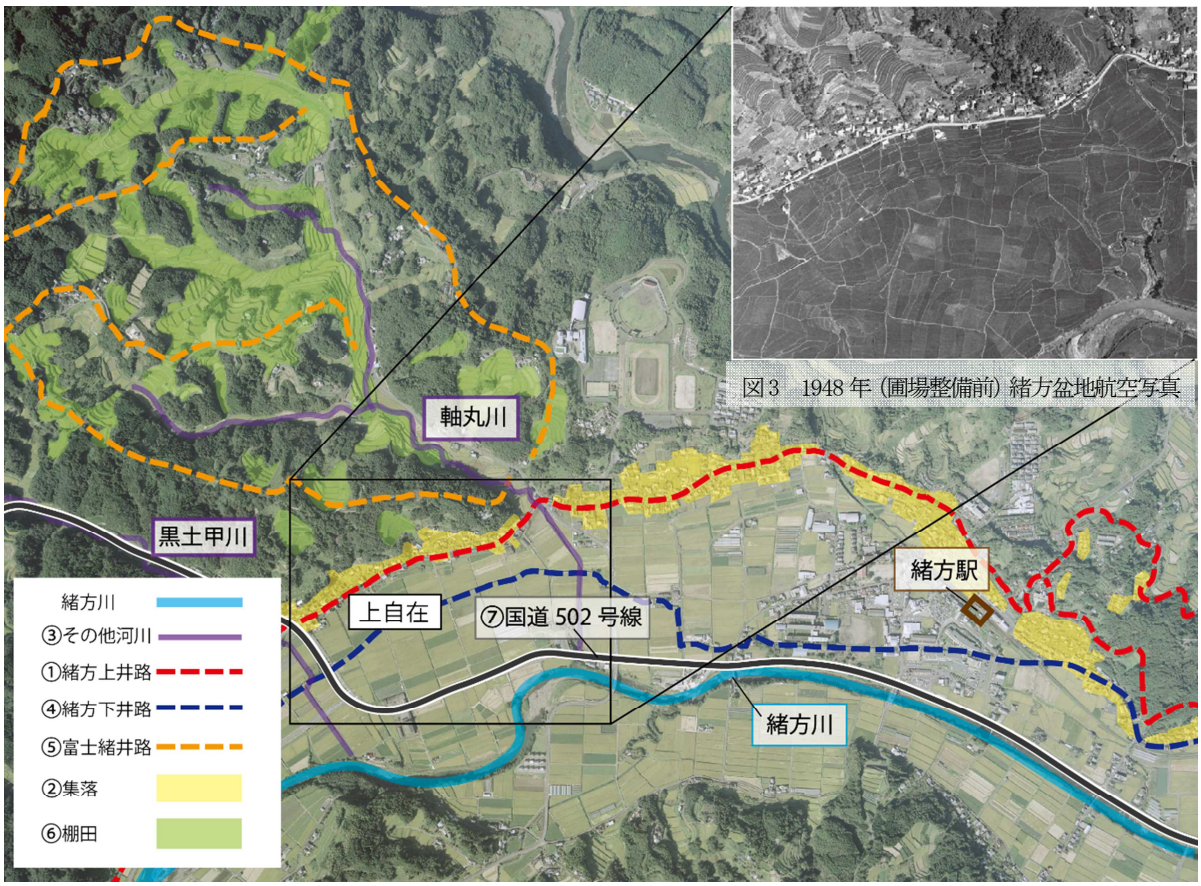


図 2　2008 年（圃場整備後）緒方盆地航空写真 [5)]

明治以降の土木技術の発達に伴い、富士緒井路（大正 3 年＜1914＞通水, 図 2⑤）などの井路が丘陵上に開削された。これにより、標高の高い山地での水田耕作が可能になり、台地にも棚田（図 2⑥）が形成された。

大正 11 年（1922）の緒方駅の開業によって、原尻橋（図 1③）、鳴瀧橋（図 1④）などの石橋が、溶結凝灰岩を利用して、多数建設されている。

昭和 47 年（1972）には、越生地区（図 1⑤）で緒方盆地最初の圃場整備が行われ、上自在地区では昭和 49 年（1974）に起工し、翌年に完成した。これにより、圃場整備前は大きさや形が不揃いであった田（図 3）が、現在は整然としている（図 2）。また、国道 502 号線（図 2⑦）や緒方下井路などのインフラが整備されたことで、自動車の利用や農業の機械化が進み、効率よく農業を行えるようになり、生活にも大きく影響を与えた。

### ③集落構成と生活・生業の関係

#### １）緒方盆地の地理的特性と集落構成

緒方盆地では、緒方川の侵食により形成された河岸段丘上に、緒方川から井路を引き込み、奈良時代から水田耕作がなされてきた。緒方川の両岸には、水田が広がり、山際に井路（図 4①, ②）と住居（図 4③, ④）が立地している。

大正 3 年（1914）、富士緒井路開通後に傾斜地に開かれた田は「新田（シンタ）」（図 4⑤）、それ以前からある段丘面上の田は「古田（コタ）」（図 4⑥）と呼ばれる。古田のある場所は、元は宅地や畑であった。寛文 2 年（1662）の緒方上井路（図 4①）の通水により、住居は全て上井路より山手側に移され、現在の集落形態となった。

昭和 6 年（1931）の基盤整備で井路に水車（図 4⑦）が新設され、上井路より山手側での水田耕作が可能になった。しかし、昭和 40 年（1965）頃の減反政策によって、管理に手間のかかる上井路より山手側の田は畑として利用されるほか、耕作放棄地となり、水車は減少していった。水車は、観光用に残されているものもあるが、灌漑用の水車は下自在地区に一基のみ残っている。

また、柔らかく加工しやすい溶結凝灰岩に覆われた地形であるため、岩壁に多数の石風呂（図 4⑧）や横穴墓[注 3)]（図 4⑨）が設けられている。

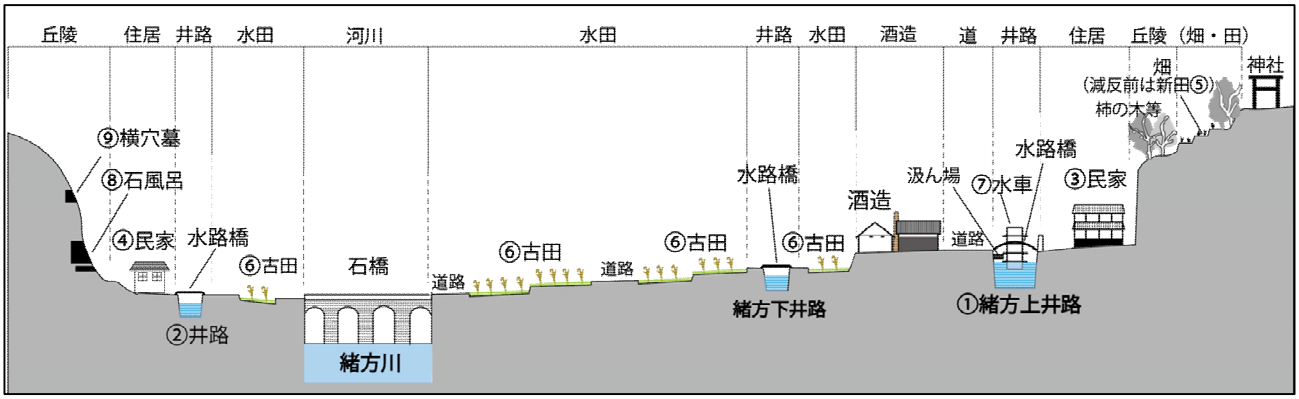


図 4　緒方盆地大断面図

図 5　上自在地区集落構成

**２）上自在地区の集落構成と生活・生業の関係**

【農業】上自在地区ではかつて、水車（図 5①）を利用した水田耕作を行っていた（図 5②）。緒方上井路より山手側では畑作も行っており、図 5③の畑では、富士緒井路開通以前、「岡大豆」[注 4)] や桑が栽培されていた。ここは、富士緒井路開通後、新田（シンタ）となったが、減反政策により、再び畑として利用されている。そのため、現在上自在地区では、緒方上井路より下流の田（図 5④）でのみ水田耕作がなされている。

【生活】上自在地区では「五千石祭[注 5)]」、「川越し祭り[注 6)]」といった祭事が行われる。これらは三ノ宮八幡社（図 5⑤）で行われ、いずれも五穀豊穣を願う祭事である。また、年に 2 回 3 月と 7 月には弘法大師像（図 5⑥）でお接待[注 7)] が行われる。三ノ宮八幡社や弘法大師像は、上自在地区の組合[注 8)] ごとに定められた係の住民により管理され、清掃などを行っている。祭りでは神楽[注 9)] が奉納されるが、三ノ宮八幡の神楽殿は老朽化により取り壊され、現在は上自在公民館（図 5⑦）に保管している組み立て式の神楽台を利用している。

家屋前の井路には、石やコンクリート製の水路橋（図 5⑨，⑩）がかけられ、家屋の住民や神社へ参拝する人々は、 この橋を渡らなければならない。そのため、これらの水路橋は、井路沿いで暮らす住民の生活に欠かせない要素であるといえる。

**④緒方の生活空間特性**

図 6 に示す家屋は、図 5⑧の M 邸である。敷地西側に主屋、東側に旧畜舎、倉庫、蔵が配置されている。主屋南面の土間の前面の軒は、出が約 2m と深くなっている。

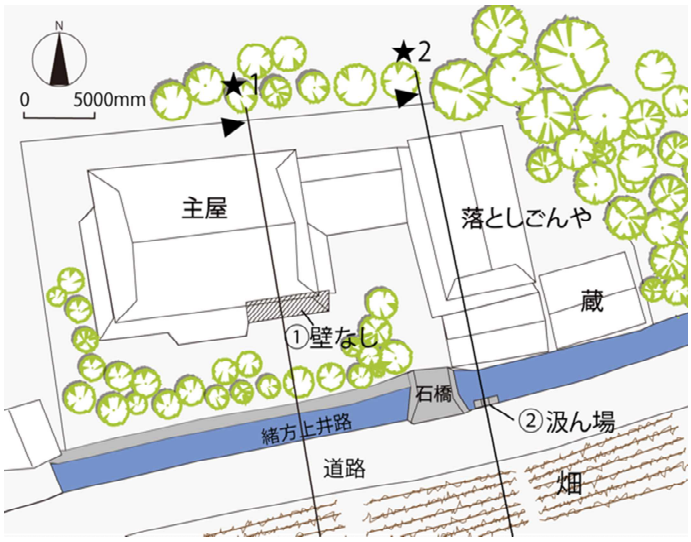


図 6　M 邸配置図

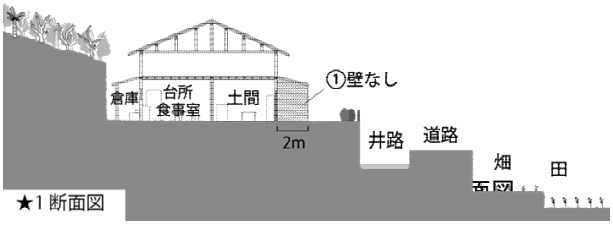


図 7　M 邸主屋（図 6★1）断面図

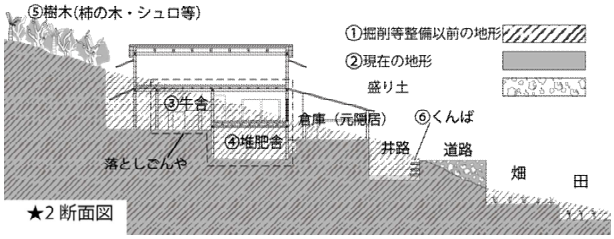


図 8　落としごんや（図 6★2）断面図

これは、軒下を雨天時等の農作業の空間として利用するためであり、この空間は「壁なし」（図 6①, 図 7①）と呼ばれている。

緒方盆地の農家住宅の多くは、緒方上井路より標高が高い斜面地に建っている。盆地内には、この地形を活かし、「オトシゴンヤ（落としごんや）」と呼ばれる二層式の牛舎・堆肥舎が数多く存在しており、上自在地区では現在、56 軒中 21 軒に落とし小屋が設けられている。M 邸の落とし小屋は、図 8 の断面図のように、溶結凝灰岩に覆われた斜面（図 8①）を掘削して、現在の土地（図 8②）を造成し、建てられている。牛舎（図 8③）で役牛を飼い、牛の糞を堆肥舎（図 8④）へ落とし、堆肥を作っていた。農業の機械化が始まった昭和 40 年（1965）頃から家畜を飼わなくなり、圃場整備後は肥料も購入するようになったことから、現在は倉庫や車庫として利用されている。

家屋の裏(図 8⑤)には、自給用に柿の木などの果樹や、農業用の縄をつくるために使うシュロ[注 10)]、農具の材料となるカシの木[注 11)]などが植えられている。

家屋の前の井路には「クンバ（汲ん場）　図 6②, 図 8⑥」と呼ばれる井路の水汲み場があり、お

写真 1　落としごんやの様子

写真 2　落としごんやの様子

よそ各住居につき１つ設けられている。圃場整備以前は、収穫した野菜を洗う際や、家畜や庭の水やり、生活用水などにも井路の水を利用していた。現在は利用頻度が減り、農繁期に農具を洗う際などに使われている。井路は田へ水を運搬するだけでなく、人々の生活のためにも利用されてきた重要なものであることがわかる。

写真３　　壁なし（図 6①）の様子と水田との関係

写真４　クンバ〔汲ん場〕（図 6②）

**⑤総括**

本調査では、緒方盆地における集落構成・生活空間特性と、生活・生業との関係を明らかにした。緒方盆地の地理的特性と集落構成より、緒方上井路の開通によって斜面地に集落が立地し、その後の井路の開通や減反政策により、土地利用や水車などの設備が変化し、現在の緒方盆地の集落が形成されたことが分かった。

また、農村集落である緒方盆地では、五穀豊穣を願う祭事が「三ノ宮八幡社」で行われ、地域住民により管理されている。このことから、三ノ宮八幡社は、地域の生活や生業を支える重要な場であることが分かった。

生活空間特性では、掘削のしやすい溶結凝灰岩に覆われた斜面地に立地する集落の地形を活かし、住居や、生業を支える小屋が建てられたことが分かった。各住居に設けられた「クンバ（汲ん場＝汲み場）」地域住民が、井路の水を農業用水だけでなく、生活用水としても利用できるようにするために不可欠であった。このことから、井路と汲ん場は住民の生活や生業を支える上で重要なものであることが分かった。また、雨天時等にも農作業を行うために設けられた「壁なし」は、天候によらず生業を行う上で重要なものであることが分かった。以上のことから、緒方盆地では、地形を活かして作られた生活空間の中に、生業を行うために必要な機能が備わっていることが分かった。

【補注】

注 1)　本調査では、豊後大野市景観計画より、「緒方盆地文化的景観」として定められている 15 地区（図 1 越生を除く）を「緒方盆地」とする。

注1)　室内に蒸気を充満させて入浴する蒸し風呂の一種。16 世紀頃に作ったとされており，現在は正月などに利用されているものもある。

注2)　古墳時代後期に発達する墓地遺構。丘陵や崖などの岩盤に穴を掘り、埋葬空間をつくる。

注3)　この地域は江戸時代岡藩に属しており、当時は米と同等の価値があったため栽培されていた。

注4)　五穀豊穣を祝って秋分の日に行われる祭。神楽や獅子舞、白熊が奉納される。

注5)　緒方三社といわれる一宮八幡、二宮八幡、三ノ宮八幡の祭礼行事。

注6)　弘法大師の遺徳を偲ぶ日。通行人や子供達を菓子等で接待する。

注7)　上自在には 4 つの組合が存在する。一つの組合につきおよそ十数世帯が含まれる。

注8)　神をまつるために奏する歌舞。

注9)　ヤシ科の植物で、耐水性に優れている。

注10)　ブナ科の植物で、強度が高く、耐久性に優れている。

【参考文献】

1)豊後大野市「平成 30 年度大野川流域の文化的景観『支流緒方川と緒方盆地の農村景観』保存活用計画等検討業務委託報告書」, 2019

2)豊後大野市教育委員会「令和元年度『大野川流域の文化的景観』第 1 回調査研究委員会」資料, 2019

3)別府大学文化財研究所「『平成 30 年度　大野川流域の文化的景観調査』報告書」, 2019

3)緒方町刊行『緒方町誌　区誌編』, 2001

5)国土地理院空中写真，2008

## ２　緒方盆地の主要な神社

### ①調査の目的と方法

文化的景観の構成要素としての緒方町の一宮神社・二宮神社・三宮神社の神社建築について、調査をすることで、その価値を見定めることを目的とする。今後の適切な保存・活用の方策を計画し実施してゆくための基礎的にして重要な情報となる。

調査は、神社境内の配置図・平面図・痕跡調査・写真撮影・棟札などの史料調査を実施した。これらの実測調査や資料調査で得られた情報をもとに総合的に考察を加えて、文化財的な価値を明らかにする。

調査は次の調査員で、次の調査日時に行われた。

＜調査員および報告書の執筆・図面作成＞

伊東　龍一　　熊本大学大学院先端科学研究部教授（報告書執筆）

池田　清華　　熊本大学大学院自然科学研究科修士１年（報告書図面作成）

我毛　翔太郎　熊本大学工学部建築学科４年

白石　和香　　熊本大学工学部建築学科４年

＜調査日＞

2019 年 9 月 11 日～12 日　　三宮八幡神社・一宮八幡神社

2019 年 10 月 19 日　　二宮八幡神社、および三宮八幡神社補足調査

### ②神社の概要

一宮八幡神社・二宮八幡神社・三宮八幡神社の創建については寿永２年（1183）に遡り、それは緒方惟栄によるという共通の由緒をもつ。すなわち、『大野郡神社大鑑』（波多野政男　昭和２年）等によれば、上自在を居城としていた緒方惟栄は、宇佐神宮に潜伏する平氏を攻めた際に、配下が神宮に火を放ったが、流れ矢が惟栄の膝に刺さって抜けない。神罰であろうということになり宇佐の神を請じて祀り、神領を奉ったところ矢は抜け、痛みもなくなったため、宮尾の地に仮の殿宇を建立し宇佐神宮を勧請して奉祀した（古宮）。またここから三本の矢を放ち、落ちた久土知、原尻、上自在の３か所に社殿を造営したのが緒方三社といわれる新の一宮八幡神社・原尻の宮下の二宮八幡神社・上自在の三宮八幡神社であるという。「神社昇格願綴」（明治 36 年５月８日）によれば、三社に分かれたのは「建久年間」（1190～1199）とも記される。

一宮八幡神社の本来の祭神は、仲哀天皇である。また宮尾の古宮から仲哀天皇・応神天皇・神功皇后が明治 11 年に大行事八幡社に合祀されたが、より関係の深い当社に明治 16 年合祀されたという。高寵命と猿田彦命も村の小社から合祀されたといわれる。境内社として八百万社と花岡社がある。

二宮八幡神社は、祭神は応神天皇と創健者の緒方三郎惟栄、および大野泰基である。境内社に高良神社に武内宿祢、八百万神社には村内小社から明治９年に合祀された海原諸神とされる。

三宮八幡神社は、祭神が神功皇后で、境内社に善神王を祀る善神王社と、伊弉諾尊と大歳神・少彦名神・天神を祀る四柱社で、明治９年に三宮八幡神社に合祀されたらしい。

今に伝わるその祭礼においても強い関連性が伺える。とくに旧 10 月 14 日、15 日の川越祭では緒方川の川向うにある三宮から川を渡ってくる三宮の神輿と川の手前で待つ一宮の神輿が一緒に二宮に入る祭である。一宮の祭神・仲哀天皇、三宮の祭神で妻である神功皇后の神輿が、子供で

ある二宮の祭神・応神天皇と出会う祭ということになる。一宮の神輿が三宮の川越しを待って一緒に二宮に入るのは、仲哀天皇が妻・神功皇后の川越しを心配してのことであろうという考察もある（北九州大学民俗研究会『緒方町の民俗』緒方町の民俗刊行会　昭和 53 年）。

**③神社建築調査の結果概要**

東西に流れる緒方川が原尻の滝から西では南に流路を変える。その原尻の滝から南東約 350 メートルの位置、小山の中腹に二宮八幡神社があり、滝の方角を向いて社殿が建つ。原尻の滝から二宮八幡神社まではほぼ一直線に道が伸びる。同じ山のより高い位置に一宮八幡神社がある。原尻の滝の南岸に川越し祭の際に仮神殿を造る場所があり、岩盤に足場を立てるための穴が認められる。原尻の滝の北東約 1.8 ㎞の位置に北の山を背後にして、南面して三宮八幡神社の社殿が建つ。したがって、川越し祭は原尻の滝を中心とした直径 2 ㎞程のエリアで行われる緒方三社の祭であることになる。

神社の建物は、神殿、拝殿、申殿、そして神門（神輿庫をもつ長屋門形式、あるいは四脚門）、境内社などからなる。

三社とも、神殿は三間社流造、拝殿は桁行３間、梁間２間の入母屋造であり、建築的な共通点も多い。したがって、建立年代が明確で江戸時代に遡る一宮神社の神殿（嘉永元年）や三宮神社神殿（文化 12 年）は重要であるが、それ以外の二宮神社の神殿（明治 43 年）をはじめ各社の拝殿・申殿、神門、末社も個々に伝統的な建築形式をよく伝える建造物である点で重要である。とくに拝殿後方にある申殿の名称をもつ建物の存在は、宇佐八幡宮の影響を具体的に見ることができで重要である。かつそれらの建造物群が成す各社の神社境内の景観が極めて重要である。

**④　個別解説**

**■一宮八幡神社**

**配置**

社殿はほぼ南西の方向を向いて建つ。鳥居の奥に入母屋造の神門を配し、その背後に低く石垣を組んで高くなった敷地に、拝殿と接続する申殿、神殿が建つ。神殿の前面の位置で左右に門・塀を設け、その奥、神殿の左右に末社が建つ。拝殿と神殿の間に申殿を配する配置形式は明らかに宇佐神宮の影響下にあることを物語る。

**神殿**

三間社流造、銅板葺。

亀甲積の石垣の基壇上に石製の亀腹をつくり土台を置く。土台上に丸柱を立て、内法長押・腰長押・切目長押、頭貫で固め、台輪を載せる。組物は拳鼻付き二手先の詰組で、妻飾は二重虹梁大瓶束とする。柱間装置は、正面 3 間はいずれも半蔀、両側面前方 1 間は板戸両開き、そのほかは横板壁である。正面および両側面の 3 方に切目縁を巡らし、脇障子を立て、高欄を付け、挿肘木の腰組で支持する。正面には木階 8 級を設ける。

庇は基壇上に礎石・礎盤を置き、几帳面取の角柱を立てる。角柱は水引虹梁で互いに繋ぎ、木鼻として正面に獏鼻（中央の２つ）と獅子鼻（両側の２つ）、側面に象鼻を付け、海老虹梁で身舎と繋ぐ。組物は連三ツ斗である。

垂木は、前方は打越垂木・飛檐垂木の繁垂木で、後方は一軒繁垂木である。屋根は銅板葺の上

に置千木、鰹木を載せる。

総ケヤキ造といってもよい建物で、妻飾には「龍」や「滝」の彫物を、脇障子には「松に鷹」・「鶴に亀」、腰組間には「浪に千鳥」・「浪に兎」、庇の組物間には「松」・「竹」・「梅」の彫物を入れるが、いずれも素木である。

写真 5　一宮八幡神社神殿　全景

写真 6　一宮八幡神社神殿　背面

建立年代については、洋釘を用いた建築であるから明治中期以降の建築であり、総ケヤキ造で彫物を多用する 19 世紀の特徴を備えていること、また部材の経年感から、明治後期の建築であることは間違いない。境内に残る、大正 2 年に記された「改造記念碑」によれば、「明治四十三年十一月十八日（中略）有野火風起祝融暴威社殿悉属烏有（下略）」とあり、続いて「明治四十四年五月二十六日神殿外二宇改造竣成」とあるので、神殿は明治 44 年（1911）竣工と考えてよさそうである。

また、「村社一宮八幡社実地調査書」（『大野郡神社大鑑』波多野政男　昭和 2 年　p. 148）もは、「一、神殿　構造　神明造欅材／屋根小板葺　建坪　九坪二合」とあるから、おそらく屋根は昭和 2 年頃には銅板葺ではなく「小板葺」、おそらく柿葺きであったと思われる。

写真 7　一宮八幡神社神殿　妻部

**拝殿**

桁行 3 間梁間 2 間、入母屋造、正面軒唐破風付、桟瓦葺。

石積一重基壇上に、礎石を置いて丸柱を立てる。床貫・内法貫・頭貫・内法長押で固め、台輪を載せる。内法長押には六葉金物を付ける。正面および背面中央間は、内法長押に代わり、一段高い位置に水引虹梁を入れる。木鼻は正面中央間左右だけ獅子鼻とし、建物の四隅では 45°方向に繰抜きの絵様木鼻を付ける。組物は平三ツ斗拳鼻付で中備はない。垂木は二軒疎垂木である。妻飾は木連格子で、懸魚を吊る。軒唐破風内には虹梁大瓶束を入れ、大瓶束左右の笈形は「雲」、虹梁と台輪の間を「波に千鳥」の彫物で飾る。四方に切目縁を設け、縁束で支える。柱間装置はなく吹き放しである。内部は 1 室で、中央間左右から前後に大虹梁を架渡して、上に蟇股を載せて、天井桁を支持する。天井は格天井を一面に張り、格間に伝統的な「梅に鶯」のような画題の他に「軍艦と水兵」「インク壺をおいた座り机」で本を読む坊主刈りの少年等を描く。絵には「五山」「五谷」あるいは「HM」の朱印がみられる。

建立年代については、使用する釘は洋釘であることや、神殿を論ずる際に引用した、昭和 2 年頃の「村社一宮八幡社実地調査書」(『大野郡神社大鑑』p. 148) にも、当時の拝殿は「一、拝殿　構造　平家造欅材／瓦葺　建坪　十一坪三合二勺」とあって主要材は、神殿と同じく欅であり、これは現在の拝殿の柱等がケヤキであるのと合致すること、拝殿においても彫物が多用される状況は神殿と同じであること。以上を合わせて考えると、大正 2 年の「改造記念碑」に記される、明治 44 年 5 月に神殿と共に成った「二宇」の一つが拝殿であった可能性は高い。

写真 8　一宮八幡神社拝殿　正面

写真 9　一宮八幡神社拝殿　背面

**申殿**

梁間 1 間、桁行 3 間、間下造　妻入、桟瓦葺。

拝殿中央間に接して建つ。方形のやや背の高い礎石上に角柱を立てる。内部の床は板張りで、柱間装置は拝殿側および神殿側は腰から上を格子にした板戸四枚を引き違いとし、両側面は拝殿側の 2 間を、雨戸をあけると開放となる窓とし、奥に戸袋を設けていた。窓および戸袋の上下は縦板羽目とする。

建立年代を明らかにする確証はないが、部材の経年感などは神殿や拝殿と同じ明治 44 年までは遡らないように思われる。

写真 10　一宮八幡神社拝殿内部及び申殿正面

写真 11　一宮八幡神社申殿　側面

**小社（向かって左）**

一間社見世棚造、桟瓦葺

基壇は切石を 2 段積とし、身舎の下だけ 1 段高く 3 段積みとする。土台上に丸柱を立てる。切目長押・内法長押・頭貫で固め、台輪を載せる。組物は出三ツ斗、妻飾りは虹梁大瓶束である。柱間装置は正面を板扉両開きで、他は横板壁である。3 方に切目縁を付けるが前方では縁板が庇柱にまで到達している。縁は持送りで支持する。正面の階はない。脇障子を設ける。庇は基壇上に直接角柱を立て、水引虹梁で互いに繋ぎ、大斗に皿斗をもつ出三ツ斗を載せる。庇柱は身舎と海老虹梁でつなぐ。屋根は一軒繁垂木である。建物に彩色はない。洋釘の仕事で経年感から、建立年代は昭和にはいってからのように思われる。しかしながら伝統的な建築形式を守る点は貴重である。なお、この小社の祭神は聞き取りでも不明であった。北九州大学民俗研究会『緒方町の民俗』(「緒方町の民俗」刊行会　昭和 53 年）は八百万社と花岡社であるとされているが、小社は次に記すように本殿向かって右側にもあるものの、どちらが八百万社、花岡社に当たるのかは不明である。

**小社（向かって右）**

一間社見世棚造、桟瓦葺

建築の形式は左の小社と同形式である。ただし、虹梁の渦・若葉といった絵様が異なり、建立時期が異なると思われるが、建立年代はやはり昭和になってからであろう。

写真 12　一宮八幡神社小社（向かって左）及び小社（向かって右）

**神門**

桁行 7 間、梁間 2 間、入母屋造、桟瓦葺、平入。

布石を巡らせた上に土台を載せ、角柱を立てる。床高さの位置で胴差を入れ頭貫との間に貫を

4 段通す。組物は大斗肘木である。桁行 7 間のうち、正面向かって右の 3 間は神輿屋で、背面の中央間は板戸 2 枚を両側に引く形式とする。他は竪板羽目目板付きとする。床は板敷、天井は棹縁天井である。また、向かって左側は、社務所である。現在はベニヤの新設の壁で内側の 2 間と外側の 1 間に分かれているが、本来は板敷き、棹縁天井の 1 室であった。

写真 13　一宮八幡神社神門（正面より）

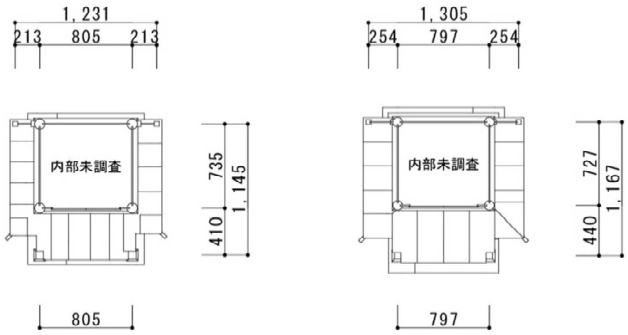


図 9　一宮八幡神社小社（向かって左）
同小社（向かって右）
平面図　　1／50

図 10　一宮八幡神社　配置図

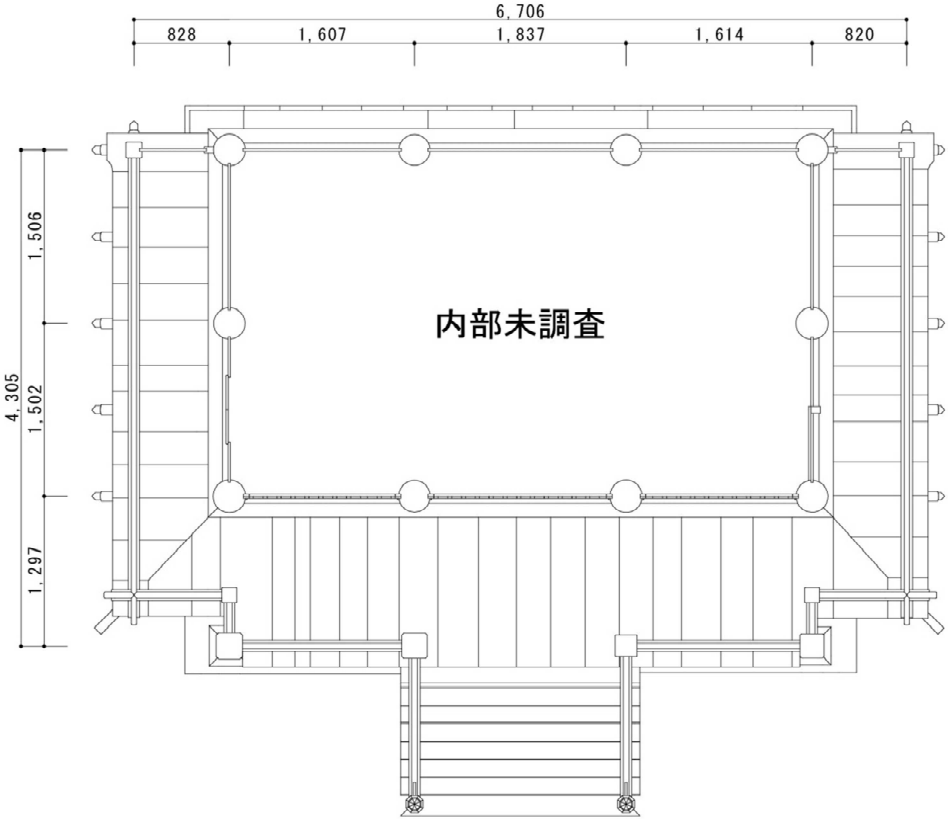


図 11　一宮八幡神社神殿　平面図　　1／50

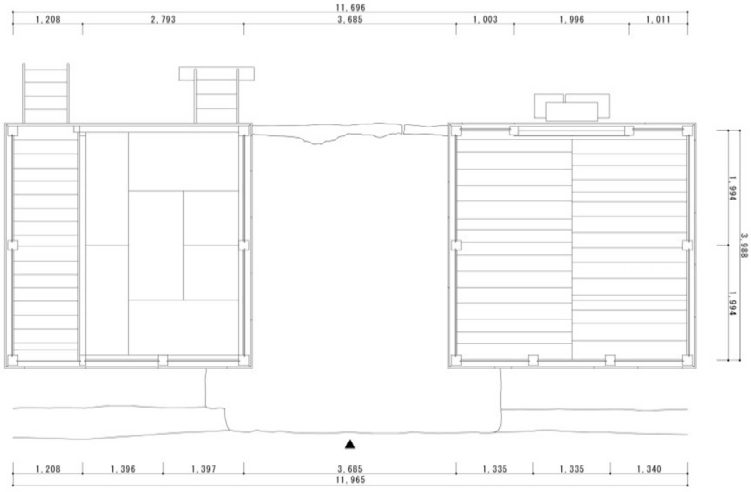


図 12　一宮八幡神社神門　平面図　　1／100

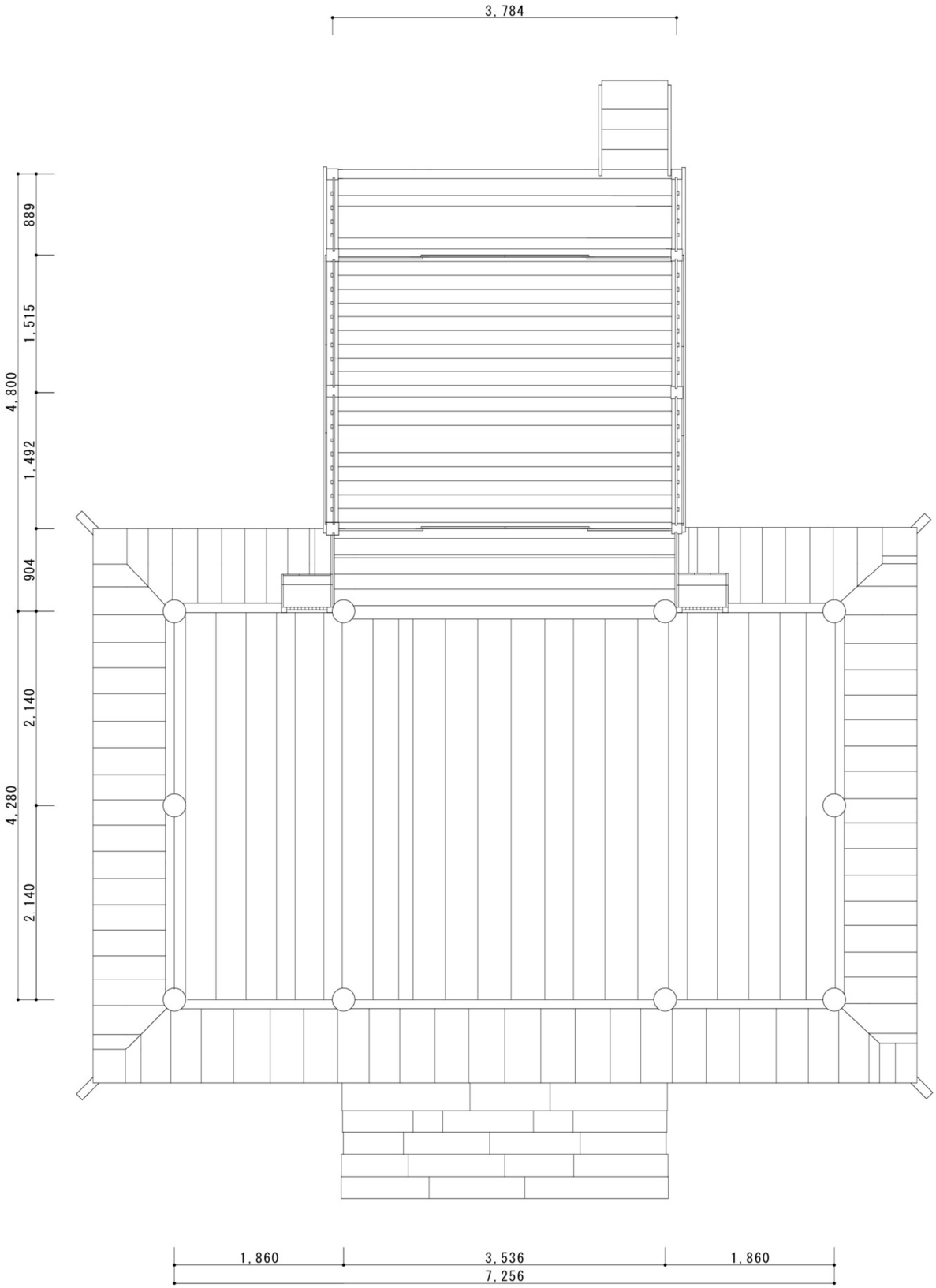


図 13　一宮八幡神社拝殿・申殿　平面図　　1／50

## ■二宮八幡神社

### 配置

社殿はほぼ北西方向を向いて山腹に建つ。参道は長く伸びて原尻の滝に達する。境内を構成する主な建造物は、石橋を渡り正面の石段を上った位置にある神門、さらに石段を上った位置にある拝殿・申殿・神殿、神殿左右に建つ末社である。

### 神殿

三間社流造、銅板葺。

石垣三段組の基壇上に亀腹石を載せて上に土台を置く。土台上に丸柱を立て、内法長押・腰長押・切目長押、内法貫・頭貫で固める。ただし、正面中央間は内法長押を打たずに虹梁型貫を一段高く入れる。台輪はないが、組物は拳鼻付き三手先の詰組で、妻飾は二重虹梁大瓶束笈形付きとする。柱間装置は、正面 3 間はいずれも半蔀であるが、中央間は虹梁型貫の位置までの高い半蔀とする。両側面前方 1 間は板戸両開き、そのほかは横板壁である。正面および両側面の 3 方に切目縁を巡らし、脇障子を立て、高欄を付け、挿肘木の三手先拳鼻付きの腰組で支持する。正面には中央間の幅の木階 7 級を設ける。

庇は基壇上に礎石・礎盤を置き、面をとらない角柱を立てる。角柱は水引虹梁で互いに繋ぎ、木鼻として正面に獏鼻（中央の 2 つ）と獅子鼻（両側の 2 つ）、側面に象鼻を付け、海老虹梁で身舎と繋ぐ。組物は連三ツ斗である。

垂木は、前方は打越垂木・飛檐垂木の繁垂木で、後方は一軒繁垂木である。屋根は銅板葺の上に置千木、鰹木を載せる。

内部は、梁間中央よりやや後方に 2 本の丸柱を立て、その位置から後方を一段高く板を張って神棚とする。さらにやや後方に改めて角柱を 2 本立てて、桁行の 3 間それぞれに板扉を付けて内陣とし、ご神体を安置する。中柱の手前の外陣は畳敷で、天井は鏡天井として一面に「龍」を墨で描く。

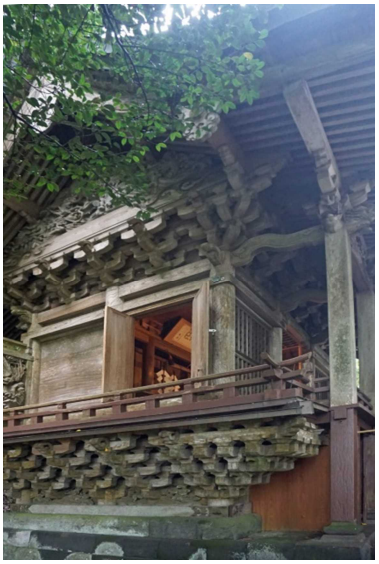

写真 14　二宮八幡神社神殿　全景

写真 15　二宮八幡神社神殿　背面

写真 16　二宮八幡神社神殿　内部

総ケヤキ造といえる建物で、妻飾には「龍」の大彫物を入れ、脇障子には「竹に鷹カ」・「飛龍」、腰組間には「鶴」・「亀」、「獅子」・「麒麟」、庇の組物間には「松」・「竹」・「梅」の彫物を入れるが、いずれも素木である。

建立年代については、和釘を用いた建築であるから明治 10 年代以前の建築であり、総ケヤキ造で彫物を多用する 19 世紀の特徴を備えていること、また部材の経年感から、江戸時代末期の建築であることは間違いない。昭和 2 年の『大野郡神社大鑑』によれば、「二宮社々殿造営其他（羽田野長蔵手記）」として「一、神殿　嘉永元年新建」とあり、神殿はこの記録の通り嘉永元年（1848）竣工と考えてよいと考えられる。

また、屋根葺材は現在は銅板葺であるが、『大野郡神社大鑑』（昭和 2 年）の、「村社二宮八幡神社実地調査書」（p. 144）に「一、神殿　流造欅材小板葺」とあるので、おそらくかつては「小板葺」、すなわち柿葺であったと思われる。

**拝殿**

桁行 3 間梁間 2 間、入母屋造、正面軒唐破風付、桟瓦葺。

亀腹石上に、礎石を置いて丸柱を立てる。足固貫・内法貫・頭貫・切目長押・内法長押で固める。頭貫は正面中央間は虹梁型とする。背面中央間も位置を高く改造している。木鼻は付けない。

組物は平三ツ斗で、中備はないが正面中央間にだけ蟇股を置く。垂木は一軒疎垂木である。妻飾は虹梁大瓶束で、破風板の拝みに懸魚を吊る。軒唐破風内には大蟇股を入れる。

四方に切目縁を設け、縁束で支える。柱間装置はなく吹き放しである。内部は 1 室で、中央間左右から前後に大虹梁を架渡して、上に拳鼻付き平三ツ斗を載せて、天井桁を支持する。天井は格天井を一面に張り、格間に伝統的な花鳥のような画題の他に近代的なテーマの画題を採用する。

拝殿の後方 1 間は角柱を立てた増築である。このほか後補材もあるが、柱・内部の内法長押・組物・天井などは当初材とみられる。

建立年代については、内法長押を和釘で打ち付けていることや、主要材ケヤキであり、彫物が多用される状況が 19 世紀らしい建築の特徴であること。神殿の建立年代について記していた『大野郡神社大鑑』（昭和 2 年）には、「二宮社々殿造営其他（羽田野長蔵手記）」によるとして、申殿について「一、申殿　明治十三年八月改造」とするが拝殿については記述が無い。しかし、申殿と拝殿は接続する社殿であるから、以上を合わせて考えると、拝殿も明治 13 年 8 月の建立である可能性が高い。

写真 17　二宮八幡神社拝殿・申殿・神殿　全景

写真 18　二宮八幡神社拝殿　正面

写真 19　二宮八幡神社拝殿　内部

写真 20 二宮八幡神社拝殿　天井格間の絵

（洋風の帽子をかぶる少年）

**申殿**

梁間 1 間、桁行 2 間、両下造　妻入、桟瓦葺。

拝殿中央間に接して建つ。石積み 4 段の上に方形の礎石を配し土台を置いて、上に角柱を立てる。足固貫・腰貫・内法貫・頭貫を通し、平三ツ斗を置く申殿としては本格的なものである。

内部の床は板張りで、柱間装置は拝殿側および神殿側は腰から上を格子にした板戸四枚を引き違いとし、両側面は竪板張であるが、明らかな後補材である。

天井はなく、梁を架け、束を立てて天秤梁で地棟を受け、さらに棟束を立てて棟木を受ける小屋組がみえる。一軒疎垂木である。

建立年代については、拝殿の項で記したように、『大野郡神社大鑑』（昭和 2 年）に「一、申殿　明治十三年八月改造」とある。明治 13 年であれば和釘を使用している可能性が高いが、現在の建物の見やすい位置の釘はみな洋釘で角釘の使用は認められなかった。角釘の使用が確認できなかったが、申殿としては伝統的な形式を守っている点から明治 13 年昆虫の可能性が高いと思われる。

なお、『大野郡神社大鑑』（昭和 2 年）の、「村社二宮八幡神社実地調査書」（p. 144）には、神殿、渡殿、拝殿、神楽殿・・・の順に建築形式を記すが、申殿という社殿名がない。記述の順や内容を考えると、ここにおける渡殿が申殿に該当しそうである。かつて渡殿と呼称された時代があったことがわかる。

写真 21　二宮八幡神社申殿　外観

**小社（向かって左）**

一間社流造、トタン葺

基壇は切石を 2 段積とし、身舎の下だけ 1 段高く 3 段積みとする。土台上に丸柱を立てる。切目長押・内法長押・頭貫で固め、組物は大斗肘木、妻飾りは虹梁に束である。柱間装置は正面を格子戸（倹飩式）で、他は横板壁である。正面にだけ縁を付けるが縁板は庇柱にまで到達する。正面の階はない。庇は基壇上に直接角柱を立て、水引虹梁で互いに繋ぎ、木鼻は象鼻に近い絵様

の木鼻である。上に平三ツ斗の組物を載せる。海老虹梁はない。屋根は一軒繁垂木である。素木の建物である。

洋釘の仕事であるが、伝統的な建築形式を守る。

小社の祭神については聞き取りでは不明であった。ただし、小社は神殿右側にもあり、後述するように、左側にあるこの建物よりも古い。そうすると北九州大学民俗研究会『緒方町の民俗』（「緒方町の民俗」刊行会　昭和 53 年）において、境内社に高良社と明治 9 年に合祀された八百万社との報告があったが、古くからあった高良社が右側の小社に相当し、左側にあるこの社は明治 9 年に合祀されている八百万社に相当する可能性がある。

**小社（向かって右）**

一間社、切妻造、トタン葺、平入。

切石積基壇の上に土台を置き四隅に丸柱を立てる。互いに頭貫で繋ぐが正面だけは頭貫の下に水引虹梁を入れる。四隅の柱上には大斗肘木を載せる。肘木は背が高く大きい。この組物は妻側では棟束を立てた虹梁を支持する。一軒疎垂木である。内部は後方に床よりも一段高くして、正面を格子戸とした神棚をつくる。したがって柱間装置は、正面は開放であるが側面は表側から神棚前面の位置まで開放の窓とするほかは竪板羽目である。
虹梁の絵様や肘木は伝統的な様式に則っているが、社というよりも小堂のような形式である。垂木より上の屋根は新材に取り換えられているが、建立年代は 19 世紀後期頃に遡る可能性がある。

前述のように建物の建立年代の古さからすると、この建物が高良社に相当するのではないかと考えられる。

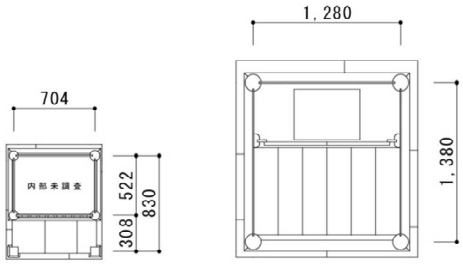


図 14　二宮八幡神社小社（向かって左）、二宮八幡神社小社（向かって右）平面図　　1／50

写真 22　二宮八幡神社小社（向かって左）　二宮八幡神社小社（向かって右）

**神門**

桁行７間、梁間２間、入母屋造、桟瓦葺、平入。

布石を巡らせた上に土台を載せ、角柱を立てる。床高さの位置で胴差を入れ頭貫との間に貫を４段通す。組物は大斗肘木である。一軒疎垂木である。桁行７間のうち、正面向かって右の３間は神輿屋で、背面の中央間は板戸２枚を両側に引く形式とする。他は竪板羽目目板付きとする。床は板敷、天井は棹縁天井である。また、向かって左側も、板敷きで棹縁天井を張った１室である。ただし、側面２間のうち後方の一間および背面外側の一間は建具が無く開放である。そのうち前者の柱の内側に高欄の痕跡が認められる。

『大野郡神社大鑑』（昭和２年）の、「村社二宮八幡神社実地調査書」（p. 144）をみると、神門の記述がないが、「一、神楽殿及神輿殿　平家造松杉材瓦葺　竪二間一尺五寸　横六間三尺」とあって、平面の縦横のプロポーション・規模からして、現在の神門に相当することは間違いない。おそらく向かって右側の部屋が神輿庫（現在と使用法は同じ）で、左側の部屋は神楽殿であったと可能性がある。かつて存在したはずの高欄は神楽殿に相応しい。神門のかつての使用法がわかる重要な遺構である。同じ形式の一宮八幡神社の神門も右側の部屋を神輿庫としていた。左側の部屋は二宮八幡神社同様神楽殿であった可能性があろう。

建立年代は『大野郡神社大鑑』（昭和２年、p. 143）には、「二宮社々殿造営其他（羽田野長蔵手記）」の記述として、神門は「一、神門　元治二年十月火災ニ付明治元年新築」とあって明治元年新築とする。建立年代はこの記述通りである可能性があるが、確認された釘はみな洋釘であるから、明治後期からの建築である可能性を捨てきれない。

写真 23　二宮八幡神社神門　正面側

写真 24　二宮八幡神社神門　背面

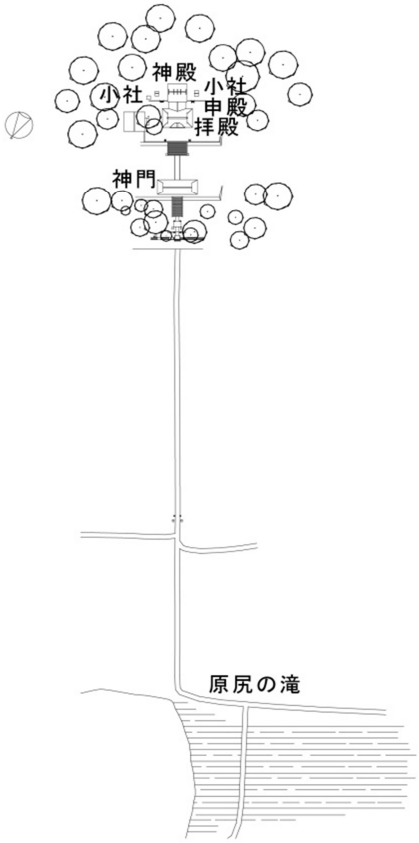


図 15　二宮八幡神社　配置図

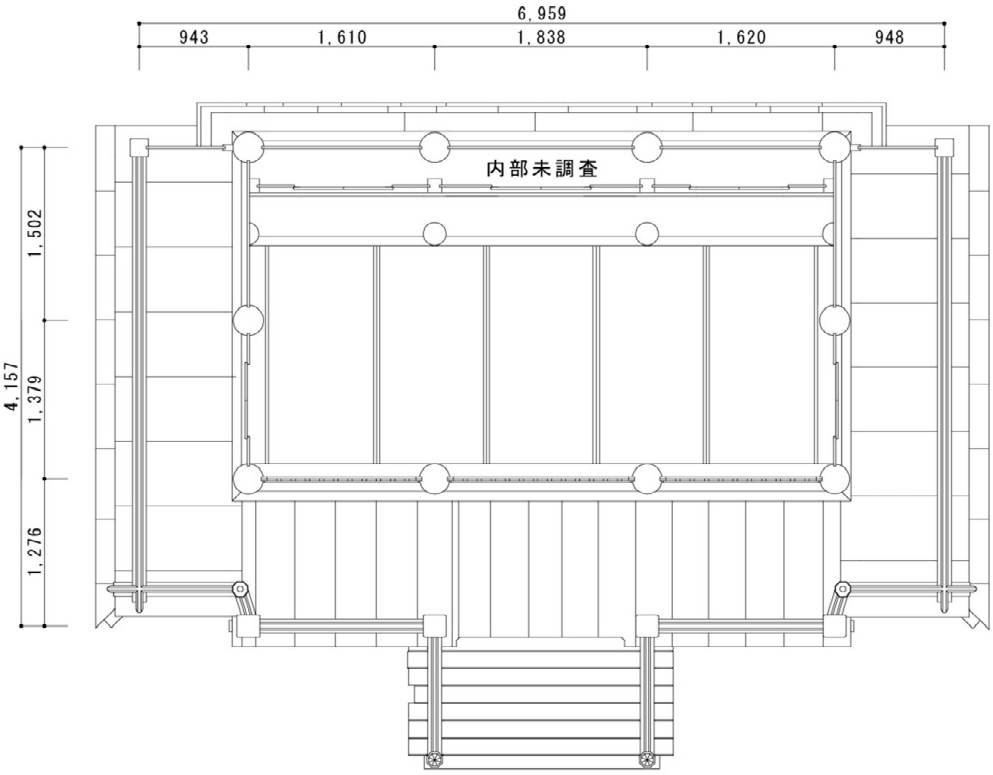


図 16　二宮八幡神社神殿　平面図　　1／50

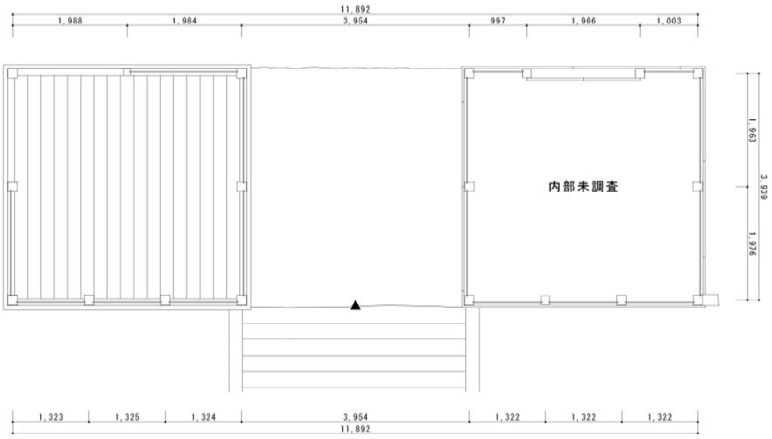


図 17　二宮八幡神社神門　平面図　　1／100

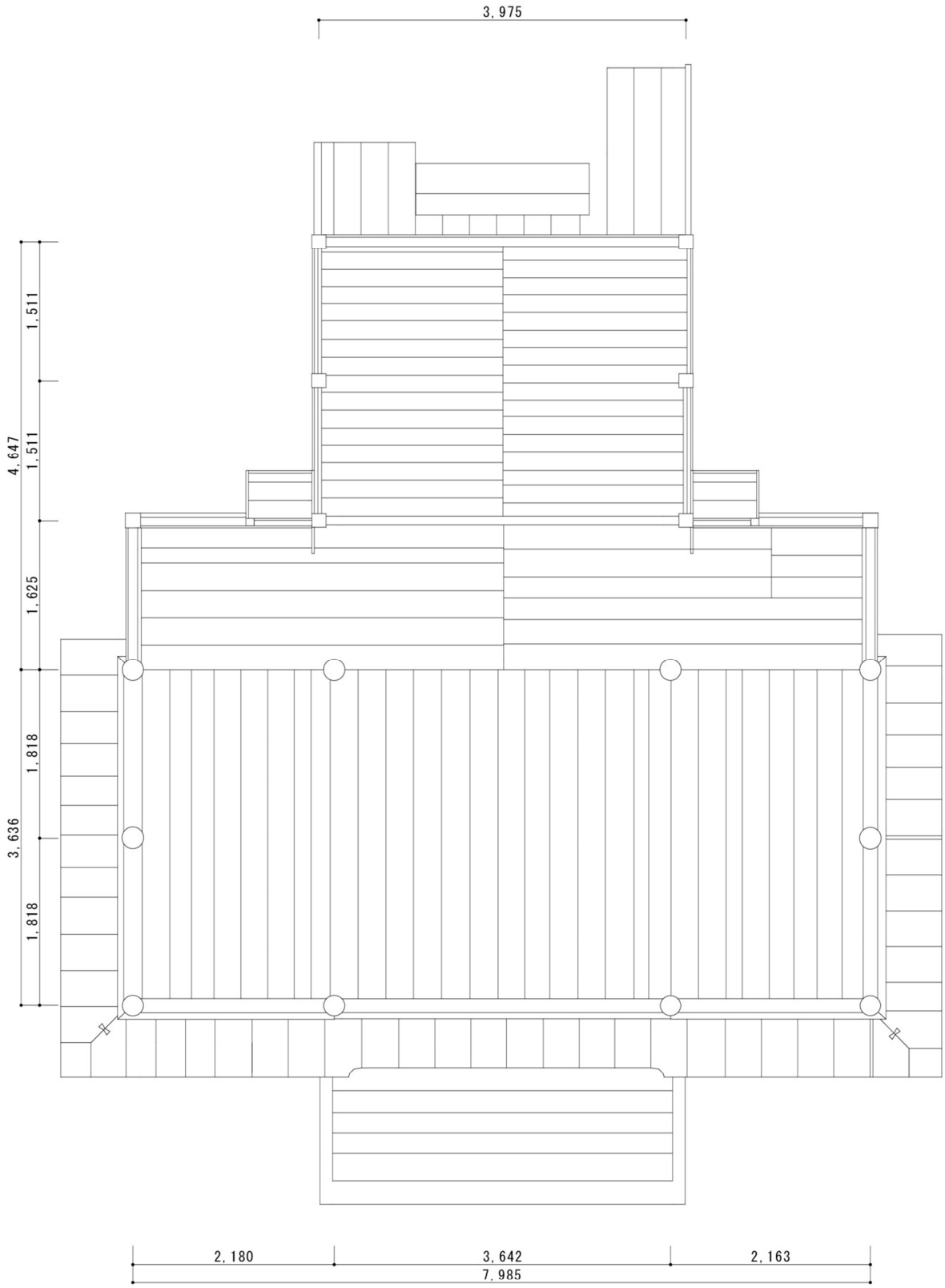


図 18　二宮八幡神社拝殿・申殿　平面図　　1／50

■三宮八幡神社

**配置**

現在は水車通りと呼称される通りから石橋を渡り、鳥居や長い石段を上った先にある神門までは、ほぼ間北へ向かう一直線上にある。神門から先の拝殿・申殿・神殿は、やや西向きに折れて配される。神殿の前面の位置で左右に門・塀を設け、その奥の神殿の左右に末社が建つ。

**神殿**

三間社流造、銅板葺。

石垣 3 段積の基壇上に、六角形の礎石を造り出して丸柱を立てる。地覆貫・内法長押・腰長押・切目長押、内法貫・頭貫で固める。組物は出組で、中備は蟇股である。妻飾は二重虹梁大瓶束とし、二重虹梁上に蟇股を置く。柱間装置は、正面 3 間はいずれも半蔀、向かって左側面前方 1 間は板戸両開き、そのほかは横板壁である。板扉の内側には、魚を池に放ち、鳥を空に放つ「放生会」の様子を描く。正面および両側面の 3 方に切目縁を巡らし、正面では縁が庇柱にまで達する。縁は縁束上に拳鼻付き三ツ斗を載せ、中備に蟇股を入れて支える。縁束は身舎の柱が立つ基壇の下に礎石を置いて立てる。縁上には脇障子を立て、高欄を付け、正面には木階 8 級を設ける。

庇は、面取の角柱を立て、互いに水引虹梁で繋ぎ、木鼻を両端の柱の正面に獅子鼻、側面に象鼻を付ける。庇柱は海老虹梁で身舎と繋ぐ。組物は連三ツ斗である。

垂木は、前方は打越垂木・飛檐垂木の繁垂木で、後方は一軒繁垂木である。屋根は銅板葺の上に置千木、鰹木を載せる。

内部は、後方を一段高く造り、角柱を立てて内法長押を打ち、三間それぞれ両開きの板扉を付けて内陣とする。中央の板扉内側には「日輪」「月輪」を描く。外陣は板敷きで天井は棹縁天井である。

柱等の主要材はケヤキで、妻飾には二重虹梁間に「龍」の彫物を、蟇股には「波に宝珠」・「波に兎」等、縁下の蟇股にも「翡翠」・「波に亀」・「鳳凰」等、庇の水引虹梁上の蟇股にも「波に日輪」等の彫物を入れ、脇障子には「鷹に猿」（左）と皇帝の位を譲ろうと言われたことに対して耳が穢れたと言って耳を洗った隠士「許由」（右）の彫物を入れるが、いずれも素木である。

建立年代については、和釘を用いた建築であるから明治 10 年代以前の建築であり、総ケヤキ造で彫物を多用する 19 世紀の特徴を備えていること、また部材の経年感から、江戸時代後期の建築であることは間違いない。今回の調査では確認できなかったが、『大分県の近世社寺建築　近世社寺緊急調査報告書』（大分県教育委員会 1987 年、p. 45）によれば、棟札があって、神殿は、拝殿

写真 25　三宮八幡神社全景

写真 26　三宮八幡神社神殿　内々陣

と共に文化 12 年（1815）建立、明治 43 年修理とされる。すでに見てきたような特徴を考えると、神殿は文化 12 年の竣工とみてよい。

写真 27　三宮八幡神社神殿外観

写真 28　三宮八幡神社神殿　内部

写真 29　三宮八幡神社神殿の扉絵

**拝殿**

桁行 3 間梁間 2 間、入母屋造、正面軒唐破風付、千鳥破風付き、桟瓦葺。

おそらく以前にあった拝殿の形式を継承する伝統形式を踏まえた建物であるが、コンクリート基礎の上に建ち、柱等には再利用された可能性のあるものが見受けられたが、部材の多くが新材に取り換えられた近年建て替えられた建物である。しかしながら内部の天井の格天井では、明治期に描かれた絵がそのまま残る格間の板をそのまま再利用している。建物の建立年代は新しいが、伝統形式を継承した境内を構成する要素として重要な建物である。

写真 30　三宮八幡神社拝殿　正面

写真 31　三宮八幡神社拝殿　内部

**申殿**

梁間 1 間、桁行 3 間、両下造　妻入、桟瓦葺。

拝殿中央間に接して建つ。拝殿同様、以前の申殿の建築形式をおそらく継承していると考えられる。近年の建築であるが、拝殿同様、境内の景観を構成する重要な要素となる建物である。

写真 32　三宮八幡神社申殿　側

写真 33　三宮八幡神社申殿　内部

**神門**

一間一戸、四脚門、切妻造、桟瓦葺、平入。

コンクリート製の基礎上に礎盤を置く。親柱は丸柱、控柱は面取り角柱である。親柱と控柱は腰貫・内法貫で固め、さらに親柱には冠木を載せた上で控柱と頭貫でつなぐ。柱上には出三ツ斗拳鼻付きを載せて、妻の虹梁蟇股を支持する。冠木上には大蟇股を載せる。大蟇股の内部には表に中川家の「柏紋」を、裏には緒方家の「巴紋」を象る。垂木は二軒繁垂木である。

写真 34　三宮八幡神社神門　外観

写真 35　三宮八幡神社神門　内部

**小社（向かって左）**

一間社流造、トタン葺

基壇は切石を 2 段積とし、身舎と前方の庇の下だけ 1 段高く 3 段積みとする。身舎は土台上に角柱を立てる。切目長押・腰長押・内法長押・頭貫で固める。組物は出三ツ斗、妻飾りは虹梁に

束を立てる。柱間装置は正面を板戸両開きで、他は横板壁である。3 方にけ縁を付け、縁は縁束で支持する。正面に木階 5 級を設ける。庇は基壇上の土台に几帳面取りの角柱を立て、水引虹梁で互いに繋ぐ。木鼻は通常の絵様木鼻の輪郭をもつが内部は刳り貫く。上に平三ツ斗の組物を載せる。身舎とは海老虹梁でつなぐ。正面は打越垂木に飛檐垂木を繁垂木とし、後方は一軒である。素木で彩色のない社殿である。

かつ伝統的な建築形式を守る。木鼻を刳り貫きにするのは明治期によくみられる。和釘が確認できなかったが明治初期頃の建築と考えたい。

ただし、聞き取りでもこの小社の祭神を明らかにすることはできず、社の内部調査もかなわなかったので明らかにできなかった。したがって、北九州大学民俗研究会『緒方町の民俗』(「緒方町の民俗」刊行会　昭和 53 年) において境内社は善神王社あるいは四柱社であることが明らかにされているが、そのどちらに当たるのかは特定できなかった。

小社（向かって右）

一間社流造、トタン葺

基本的に向かって左の社と同形式で酷似する。こちらは和釘の仕事が明らかであるから、向かって左の小社同様、建立年代は明治初年としておきたい。

写真 36　三宮八幡神社小社（向かって左）

写真 37　三宮八幡神社小社（向かって右）

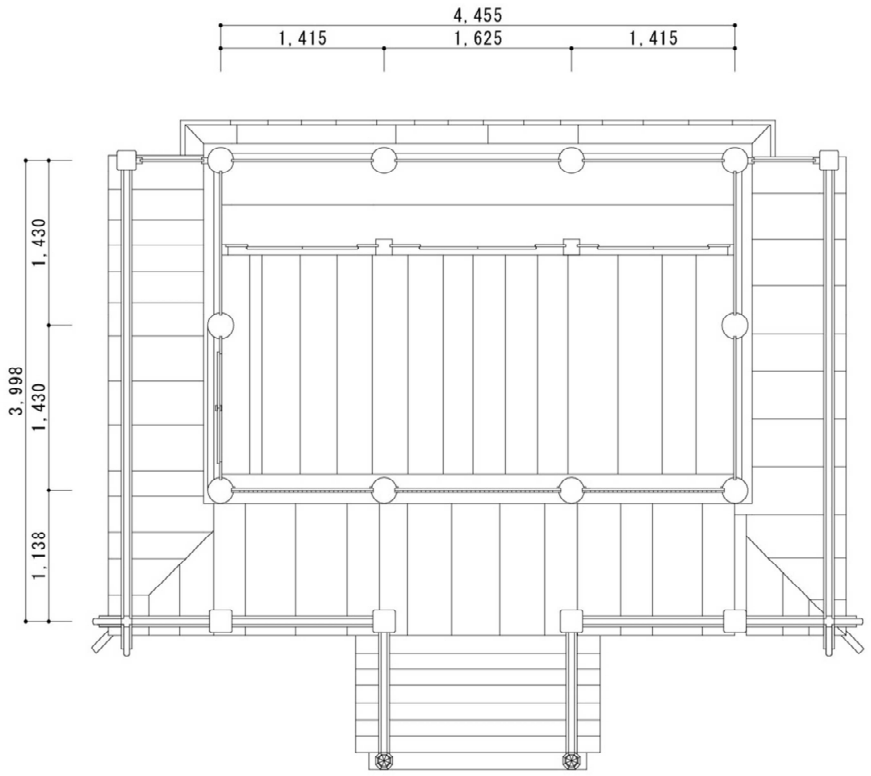


図 19　三宮八幡神社神殿　平面図　　1／50

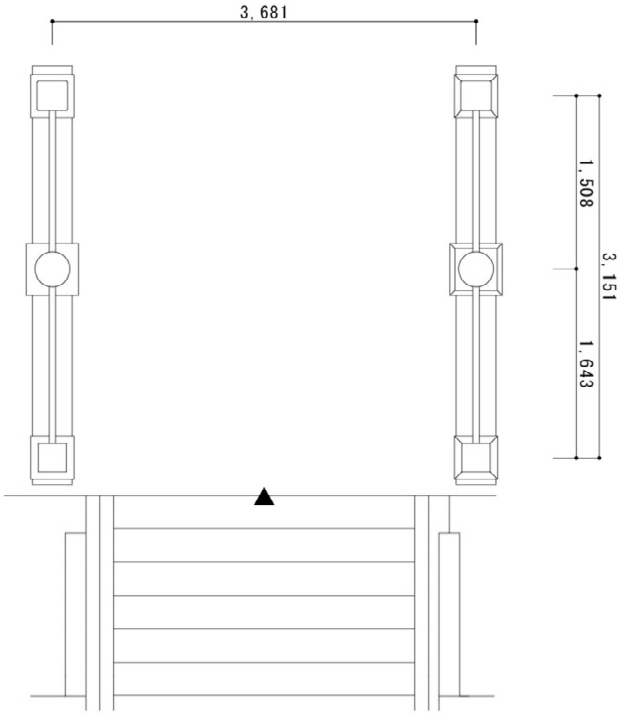


図 20　三宮八幡神社神門　平面図　1／50

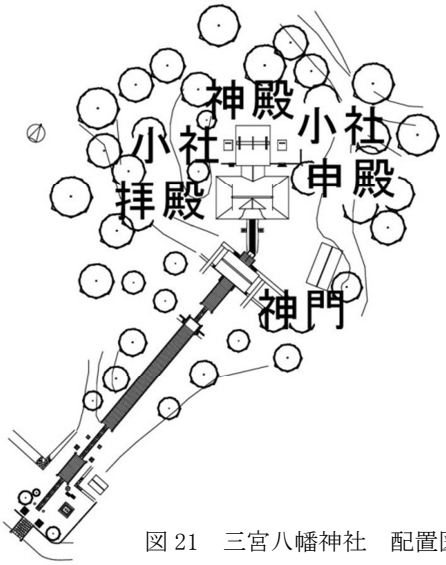


図 21　三宮八幡神社　配置図

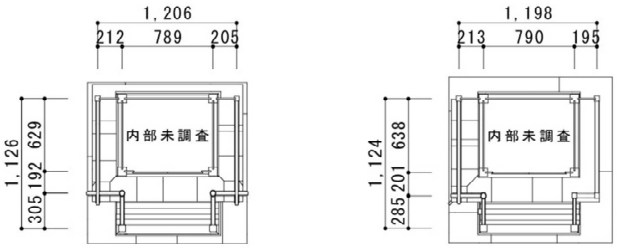


図 22　三宮八幡神社小社（向かって左）、同（向かって右）　平面図　1／50

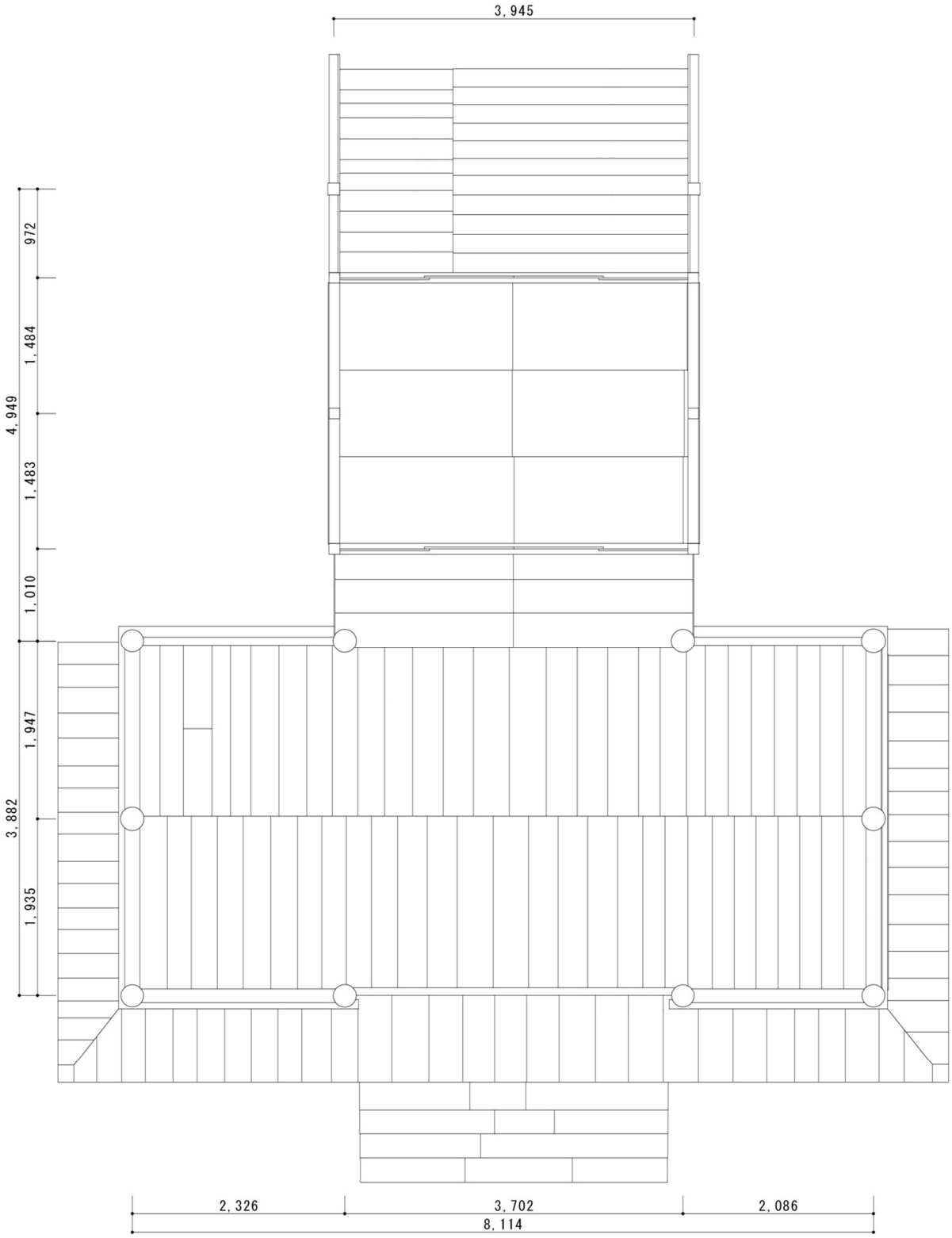


図 23　三宮八幡神社拝殿・申殿　平面図　1／50